2025.6.11

第 26 回九州前方後円墳研究会長崎大会

１．第 26 回九州前方後円墳研究会長崎大会について

６月７日（土）から８日（金）にかけて標題の研究会が雲仙市瑞穂町公民館で開催されました。既に梅雨入りしておりましたが、研究会終了まで雨に降られることもなく無事に開催されました。

参加者は約 100 名で、九州のみならず全国各地から参集されており、大盛況でした。

九州前方後円墳研究会（以下、九前研）が発足して鏡を全体テーマとして取り上げることは初めての試みであったとのことで、その関心の高さが窺えました。

研究会は辻田淳一郎先生の基調発表から始まり、九州各地の弥生時代終末から古墳時代の銅鏡について事例や搬入経路、経緯を中心に地域発表が行われ、最後に討論会を行うという日程で開催されました。

ここ 20 年ほどの銅鏡研究の進展は目覚ましく、様々な学説が提起され、活発な議論が展開されています。勉強不足の筆者などは理解が追い付かないほどです。

その点で、辻田先生の基調講演ならびに先生の資料集掲載の論攷は、この間の銅鏡研究の活況を時代ごと、課題ごとに簡潔に、かつ整然と整理されており、大変ありがたい内容になっています。ここでそれを要約することは至難の業であるため、ぜひ一読をお勧めいたします。

続く各地域の担当者による報告は資料紹介と銅鏡の流入経路や契機を中心としたもので、限られた時間に弥生終末から古墳時代の銅鏡を概観しなくてはならず、集成作業も併せ、大変ご苦労されたと拝察しました。今回は資料紹介の色合いが強かったのですが、今後、各地の政治集団間の鏡の流通の様相など研究の深化が大いに期待されました。

さて本大会のテーマのひとつである銅鏡の入手および配布の問題に関して、会場で福岡市の久住（くすみ）猛雄氏から新説が提起されました。正確を期すために資料集から引用いたします。「古墳時代初頭以降、銅鏡の外交交渉による入手は、「倭王権」「初期大和政権」が、「一手

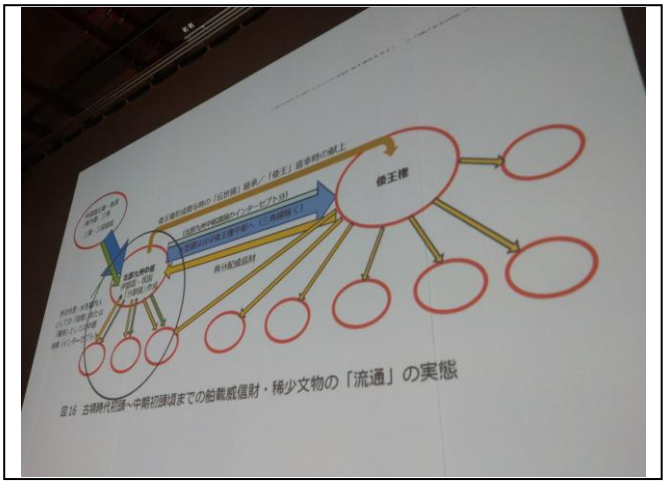
に」「外交を掌握」して、全て倭王権中枢経由で北部九州を含む各地に配布されたという言説が横行しているが、その考えだと、そのような特異な事実を説明しにくい。つまり、古墳時代初頭以降も一定期間、「伊都国」「奴国」地域の大首長（地域王権）は、倭王権の外交交渉を実質的に「水先案内人」として関与し、ある場合には主導するようなことがあって、その「見返り」「役得」として、本来は全て「倭王権」中枢が入手すべき舶載鏡の「一部」について、「伊都国」「奴国」の大首長が外交過程での「インターセプト（途中で奪う、阻止する意：筆者註）」的な入手を留保されたのではないか、という仮説を提示する。」

というものでした。この久住氏の「役得説」とも言うべき新説は討論の後半でも議論されましたが、今後どのように展開していくか注目されるところです。

　以上、雑駁ですが、研究会の概要のご紹介でした。最後に長崎大会の企画立案から準備、開催まで実質的にお一人で行われた諫早市文化振興課の野澤哲朗氏に大いに感謝申し上げます。

　また、県内出土鏡の展示公開、会場設営や撤去にあたられた長崎県考古学会事務局や雲仙市教育委員会生涯学習課、(株)埋蔵文化財サポートシステム長崎支店の皆様に篤くお礼申し上げます。

文責：古門



上　会場の様子
左　久住氏提唱の新説の概念図